

戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発） 研究開発成果実装支援プログラム（成果統合型）

「国際基準の安全な学校・地域づくりに向けた協働活動支援」

Collaborative Activity Support for Safe School and Community Based on International Standards

実装活動成果報告書

（実装活動期間 平成 25 年 5 月～平成 28 年 3 月）

実装代表者：山本俊哉（一般社団法人子ども安全まちづくりパートナーズ代表理事・明治大学教授）

1 対象とする問題とプロジェクト目標

本プロジェクトは、RISTEX『犯罪からの子どもの安全』研究開発領域（平成 19～24 年度）で得られた複数の研究開発成果を集約した統合実装活動である。

子どもの犯罪被害は近年減少傾向にあるものの、その対策は経験測に頼るところが多く、科学的根拠（エビデンス）に基づいた予防の促進が社会的に求められている。一方、地域や学校においては、防災に対する全国的な関心の高まりに加え、集団登下校中の小学生死傷事故を契機とした通学路の一斉安全点検等、犯罪以外の問題にも対応が求められており、関係者の協働の必要性がますます高まっている。

セーフコミュニティ（SC）やインターナショナルセーフスクール（ISS）の普及に見られるように、エビデンスに基づいた協働活動は以前に比べると確かに進んでいる。しかしながら、PDCA サイクルに則ったマネジメントが定着しているとは言い難い状況にある。また、『犯罪からの子どもの安全』研究開発成果の中には防犯以外の分野に応用可能なものが少なくないが、それらを現場ですぐに使える状況にはなっていない。地域や学校の現場では、担い手の負担を軽減し、従来の取り組みの改善につながるプログラムが必要とされている。

そこで、本プロジェクトでは、SCやISSをはじめ、エビデンスとPDCA サイクルに基づいた総合的な安全性の向上に取り組む、地域や学校の協働活動の持続的な展開を支援するため、「SC版総合安全学習プログラム」と「安全意識評価システム」、「傷害記録評価システム」、「ISS版総合安全学習プログラム」をパッケージ化して、それらのプログラムとその適用事例などの成果を「協働促進 Web サイト」に搭載して公開し、SCやISS以外の地域・学校等でも広く活用されることを目標とする。

2 プロジェクトの活動と成果

2-1 実装活動と成果の概要

（1）統合実装の方法とアプローチ

- ・統合実装 1 年目は、SCの厚木市を中心に地域や学校の現場のニーズを把握しつつ、講習会等で『犯罪からの子どもの安全』の研究開発成果を紹介することから始めた。新たに教材を作成してワークショップ（WS）とパッケージ化するとともに、現場のニーズに合わせたコンテンツをプラスした。
- ・統合実装 2 年目は、実装先を SCの豊島区や秩父市等に広げてモジュール化を図るとともに、新たなニーズに対応したプログラムを開発し、教材とWSのパッケージの改善を図った。
- ・3 年目は、地域や学校における担い手の育成を目指してプログラムのブラッシュアップを図った。

（2）SC版総合安全学習プログラム

- ・「まちの安全点検マップ」は、自治会やPTAの担い手の負担を軽減しつつ、点検結果をまとめたマップを地域の改善に活かせるよう、シールやカード、ワークシート等のツールをパッケージ化した。
- ・「聞き書きマップ」は、まち歩き中の安全点検と記録を容易にするため、GPSやICレコーダーを活用して科学的な安全マップを短時間でつくれるようにし、各地で実装を重ねてバージョンアップした。
- ・「安全行動イメージトレーニング」は、子どもの外傷データや過去の災害事例をベースに、安全な行動のイメージを膨らませながらリスク・コミュニケーションが図れるような教材を作成した。
- ・SC版としてSCの厚木市や秩父市等で試作を重ねたが、SC以外の地域でも普及している。



図1：統合実装の成果のプログラム一覧 図2（右上）：聞き書きマップ 図3（右下）：教材を使ったグループワーク

(3) 安全意識評価システム

- ・安全意識評価システムは、意識や行動のデータをベースに、安全の取り組みを評価する調査票を作成するとともに、そのカスタマイズやデータのグラフ化を省力化したオンライン支援ツールを開発した。
- ・作成した調査票は、地域住民向けと学校向けの二種類があり、いずれも標準版を一部加工すれば、それぞれの地域や学校の事情に応じてカスタマイズできるようにした。
- ・安全意識の評価は、「関与度（参加経験・認知度）」「充実度」「重要度」「参加意向」の4つの指標を設定して、パス解析やバブルプロット等により分析できるようにした。
- ・当初、ISS 認証取得をめざす2校で実施を依頼したが、忙しさを理由に断られた。そこで、安全意識だけでなく、子どもの心の成長に関する調査票を組み込んだことで、他の3校では2年連続実施され、2年目には全校児童生徒対象の調査に発展した。
- ・それらの調査結果から、地域や学校で実施した安全学習プログラムに関する評価を読み取ることができた。

(4) 外傷記録評価システムと ISS 版総合安全学習プログラム

- ・当初、外傷サーベイランスのソフトウェアを開発して厚木市の ISS で導入を図ったが、そのみでは学校の導入意欲を引き出すのに十分でないことが明らかになった。そこで、安全学習プログラムと、パッケージ化したコンテンツを作成し、まずは学校のニーズに合わせたコンテンツを提供してデータ収集の意欲を高めた。その結果、都内の ISS の2校で外傷記録評価システムの導入に成功した。

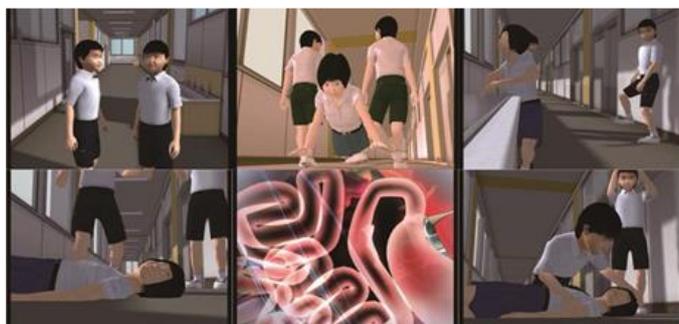


図4：アニメーションを使って作成した安全学習教材



図5：傷害サーベイランスのソフトウェア

- ・豊島区のISSでは、小学5年生を対象に傷害予防に必要とされる3つのE（Enforcement：法制化、Environment：環境改善、Education：教育）を伝えるという新しい安全学習を開始し、校内の安全に関する写真記録WSを含む5時限の安全学習プログラムを展開した。授業の前後でアンケートを取ったところ、図6のとおり、授業終了後の傷害予防に対する意欲の高まりが明らかになった。
- ・以上の活動を通して、Implementation Science（社会実装の科学）の知見として、①コンテンツ駆動型アプローチ、②クルージ・アプローチ、③テクノロジー活用アプローチの3つが有効であることが明らかになった。
- ・学校における安全学習プログラムのモジュール化にあたっては、学習指導要領の中に自然に組み込めるように工夫した。

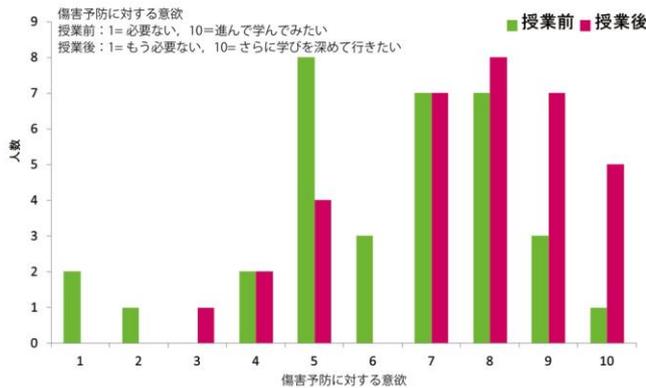


図6：授業前後の傷害予防に対する意欲の変化

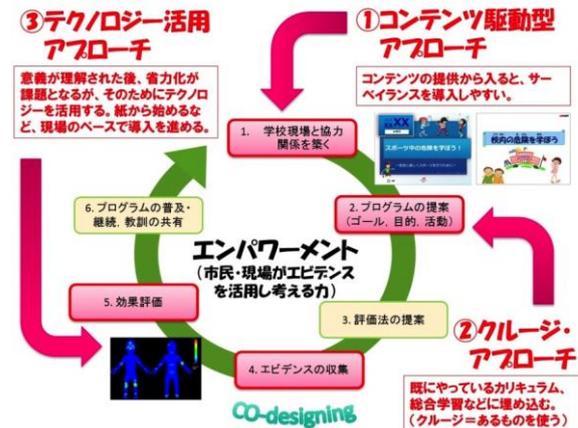


図7：実装活動のための3つのアプローチ

(5) その他の安全学習プログラム

- ・思春期の中高生を主な対象として、社会と情動の学習をベースにしたワークショップ形式の授業を行う「いじめ・自殺予防のための3stepプログラム（SEL-short）」のコンテンツを作成した。
- ・情報化社会における子どものインターネットリスクの課題を大人と子どもとの対話により解決していく「子どもとケータイ・インターネット」のコンテンツを作成した。

(6) 協働促進 Web サイト

- ・協働促進 Web サイト「エビサポ」を作成し、実装したプログラムとその適用事例を掲載した。
- ・姉妹サイトとして事例紹介を兼ねた「SC 推進自治体ネットワーク会議ホームページ」を作成した。
- ・実装した成果の海外への情報発信と共有を図るため、「エビサポ」の英語版を作成した。
- ・親しみやすいサイトをめざして「エビサポ」の愛称をつけ、Facebook や Twitter から発信した。
- ・両サイトは今後、SC 推進自治体ネットワーク会議の会費等により自立的・継続的な運営を目指す。

2-2 複数の成果を統合した意義、シナジー効果

(1) 統合実装による適用対象の拡大

プロジェクト間の人材の交流と、共通のモデル地区を持つことで、プロジェクト成果の組み合わせが容易となり、SC や ISS 以外の地域や学校、児童館や幼稚園など従来よりも適用対象を拡大することができた。また、防犯だけでなく、事故予防、自殺予防、災害予防など子どもに関わる幅広い安全領域に適用できる様々な教材を作成することができた。

(2) 統合実装によるパッケージ化とモジュール化

同一のモデル地区やモデル校において統合実装することにより、それぞれの地域や学校のニーズに適用したオーダーメイドのプログラムをパッケージ化することができた。また、別の地域や学校等で繰り返し実装することによりモジュール化することができた。

(3) 適用と評価を通じた「使いやすい」プログラムの提供

様々な地域や学校等で適用と評価を繰り返し行って研究開発成果を改良した結果、ユーザーによって「使いやすい」プログラムや教材を提供することができた。

(4) 実装推進母体同士の連携

実装段階に入った時に協働でコンテンツを開発してきたことで、各コンテンツの母体となる団体同士の連携体制が取りやすくなった。また、共通のポータルサイト「エビスポ」を持つことで、各団体のつながりをアピールすることができた。

2-3 その他の社会的影響

- ・セーフコミュニティのアジア会議と国際会議で、本プロジェクトの成果を紹介したところ、研究開発成果の統合実装のプロジェクトと「使いやすい」教材・プログラムに強い関心と高い評価が得られた。
- ・安全行動イメージトレーニングは、「エビスポ」などで案内したところ、韓国で最も多くの学校を抱える京畿道教育委員会を通じて管轄の小中学校に紹介された。
- ・『聞き書きマップ』は、国交省やJSC、全防連等の関係誌で紹介された。また、来年度の警察白書や文部科学省の防災教育ウェブページにも紹介される予定である。

3 今後の展開と活動照会先

(1) 安全行動イメージトレーニング（通称「安トレ」）

【担当機関：子ども安全まちづくりパートナーズ+生活環境工房あくと】

「エビスポ」で紹介するとともに、必要とする児童館や小学校などに教材を頒布する。

(2) アンケート調査（地域住民版・学校版）【担当機関：同上】

「エビスポ」で紹介し、研修会を開催する。詳細な分析と専門的助言が必要な場合は有償で承る。

(3) まちの安全点検マップ 【担当機関：子ども安全まちづくりパートナーズ】

「エビスポ」で紹介し、開発したワークシート等は無料ダウンロードできるようにする。

(4) まちあるき記録作成支援ツール『聞き書きマップ』 【担当機関：予防犯罪学推進協議会】

担当機関のWEBサイトで紹介し、文科省のモデル事業や全防連の研修等を通じて全国展開を図る。

(5) いじめ・自殺予防の3stepプログラム 【担当機関：子ども安全まちづくりパートナーズ】

臨床心理士が学校で実践を始めており、学校カウンセラーなどを通じて普及を図る。

(6) 子どもとケータイ・インターネット 【担当機関：NPO 法人青少年メディア研究協会】

「エビスポ」で紹介し、開発したワークシートは無料ダウンロードできるようにする。

(7) 傷害サーベイランスに基づく安全学習プログラム 【担当機関：NPO 法人 Safe Kids Japan】

担当機関のWEBサイトを通して無料提供するとともに、学校等と連携して研修会を開催する。

(8) 防犯 e-learning 【担当機関：大阪教育大学 安全教育研究会】

日本セーフティプロモーションスクール協議会等を通して、開発した教材のさらなる普及を図る。

4 主な実装活動、成果発表等実績

- ・神奈川県厚木市における実装に向けた各種研修会・ワークショップ、合計16回
(2013年6月1日～2015年10月12日)
- ・埼玉県秩父市における実装に向けた各種研究会・ワークショップおよび成果発信・報告ポスター発表
(2014年7月13日～2015年12月17日)
- ・Webサイト：「エビデンスに基づく安全な生活環境づくり」 <http://evisapo.com> (2014年12月1日～)
Facebook： <https://www.facebook.com/evisapo/?fref=ts> Twitter： <https://twitter.com/evisapo>
- ・日本市民安全学会との共催によるSC推進自治体等関係者への成果発信・報告イベント：
明治大学 (2014年4月20日)、堺市立東文化会館 (2014年11月29日)
- ・The 7th Asia Conference on Safe Communities, 口頭発表3題・ポスター4題発表 (2014年5月)
- ・The 22nd International Conference on Safe Communities, 口頭発表6題・ポスター8題発表 (2015年11月)
- ・成果報告会「子どもの安全×エビデンス～科学的根拠に基づく安全な学校・地域づくりの協働促進に向けて」ワテラスコモン (千代田区) ホール, ギャラリー (2016年1月22日)